



# ふるさとジオ塾通信第17号

塾生のみなさん、こんにちは。

昨年度の最終講座となった前回は、現役の手漁師を講師にお迎えし、様似の東側・平宇～冬島～旭の海での漁の様子をお話していただきました。昆布は採るのも大変だけど採った後も出荷までの間には相当な手間がかかっていること、昆布を中心にしつつもその合間に様々な魚種を対象とした様々な漁が行われていることなどを教えていただきました。

ジオパークというと、とにかく陸の上のことばかりイメージしがちですが、講師の伊藤さんの「今後もこの大地で漁をしていきたい」という言葉で、海も大地（ジオ）の一部なんだということに改めて気づかさせていただきました。これからは、これまで以上に「アポイの根っこ」の海で獲れる（採れる）「ジオの恵み」のありがたさをかみしめ、そして漁師さんたちに感謝しながら、様似の前浜の昆布や魚介類をおいしくいただきたいと思えます。



## 今年度のジオ塾&第1回講座（5月）のご案内



さて、本通信の前号で「ジオ塾が変わります！」とお伝えしましたが、なにが変わったのか？

1つは、これまで野外講座は登録いただいた塾生に参加を限定してきたのですが、今年度からはよりたくさんの方々に楽しんでいただくため、「誰でも参加OK」とした点です。2つ目は、講座によっては、よその人にアポイ岳ジオパークを楽しんでいただくための有料のジオツアーとの合同企画とした点です。でも、ご安心を。塾生のみなさんには、これまでどおりこの「ふるさとジオ塾通信」で講座のご案内をしていきますし、有料の講座であっても「塾生は無料」とさせていただきます！というわけで、引き続きふるさとジオ塾講座にどしどしご参加いただくとともに、交流の輪を広げていただきますよう、よろしくお祈りします！

そして、「新生ふるさとジオ塾」の第1弾企画は「様似を歩こう！」（ジオツアーとの合同企画）です。ジオ塾生と様似町民は参加料無料ですので、友人知人をお誘いの上、是非ご参加ください。

### 第1回講座 野外「様似をあるこう！」

様似に2つあるフットパスコースを2日間にわたって歩きます。  
「両日参加」又は「いずれかのみ参加」のどちらでもOKです。

#### 5/12（土）【様似八景コース】観音山の満開の花と海岸景勝地

1. 行程：様似駅～観音山（春花の観察）～ふれ愛ビーチ～エンルム岬～様似駅
  2. 日程：集合 13:00 様似駅／解散 16:30（予定）様似駅
- ※1 歩きやすい服装と靴でご参加ください。  
※2 塾生及び様似町民以外は参加料 1,000 円が必要です。



オオバナ/エンレイソウ  
シラネアオイやカタクリ  
が満開かも!?

#### 5/13（日）【様似山道コース】松浦武四郎も歩いた江戸の古道

1. 行程：幌満（山道東口）～耶馬溪絶景ポイント～原田宿跡～コトニ小休所～山道西口
  2. 日程：集合 9:00 アポイ山荘前／解散 14:30（予定）アポイ山荘前  
（歩いた後は山道終点からアポイ山荘までバスが出ます。）
- ※1 昼食を忘れずに持参してください。  
※2 歩きやすい服装と靴でご参加ください。  
※3 塾生及び様似町民以外は参加料 1,500 円が必要です。



エゾオオサクラソウの  
大群落に期待!

塾生でも、参加を希望される場合は事前のお申し込みが必要です。  
様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会 tel 0146-36-2120

# 第11回講座のおさらい

## 「アポイの根っこから」 ～冬島・平宇・旭周辺の海の話～

講師 えりも漁協冬島支所

青年漁業士 伊藤 栄 さん (右写真)

青年部長 泉 理 さん



海から見る漁場は、まさにアポイの根っこ

### 1. はじめに

青年漁業士とは、所属組合の推薦を受けて道から任命されるもの。浜の中核リーダーとして全道の漁師仲間と交流を深め、その結果を地元還元することで、浜の活気を盛り上げることを期待されている。

今日のタイトル「アポイの根っこ」は、船で沖にでて漁場を眺めると、冬島の海はまさにアポイ岳のふもと「根っこ」にあることがよくわかるから。今日は、アポイの根っこに漁場を持つえりも漁協冬島支所での漁の様子をお話する。

### 2. 冬島の漁場

冬島支所の漁場は、西は類似町平宇から東は旭までの間。漁場の海底の環境は、海岸に近い部分を大まかに見ると、平宇付近は一枚岩盤の平磯、日高耶馬溪の付近はとがったような地磯（じいそ）、旭の海岸は玉石、さらに、ところどころ砂浜とかなりバラエティに富んでいる。沖の方を見ると、日高耶馬溪の沖は起伏に富むが、沖にいくにしたがって平坦になり変化が無くなる。海岸近くは採海藻に適した磯場が多いので、組合員のほぼ100%が1年を通じて昆布やフノリなどの採海藻に携わりながら、その合間に他の魚を行っているというのが冬島の魚の特徴である。



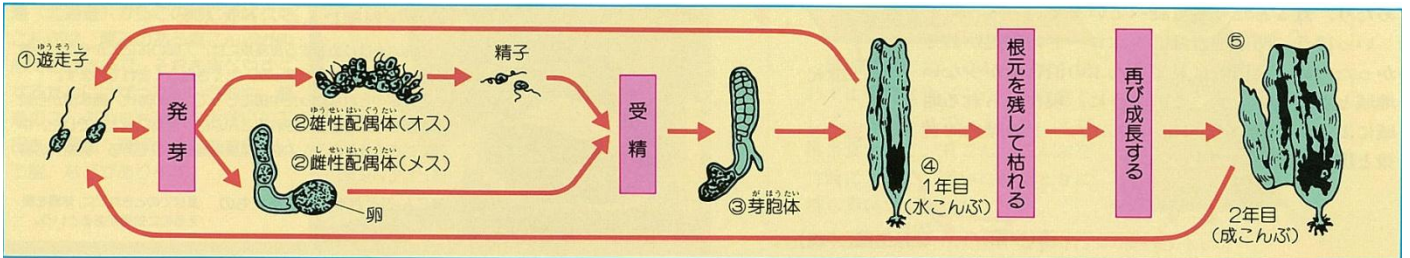
### 3. 冬島の1年の漁模様

自分が実際にやっている漁を例に、1年間の漁の流れを説明する。1月は時化などで浜に寄りついた昆布を採取する「拾い昆布」で始まる。2月に入るとフノリ採り、3月にはマツモ採り、エゾバフンウニ（ガンゼ）漁、ホッキ漁が始まる。4月はサケマスの春定置網漁が始まり7月まで続く。6月はナマコ漁。また、カレイ類が岸寄りするので、刺し網漁も始まる。そして7月に入ると採り昆布の季節。また、7月からお盆頃にかけてはタコ箱漁。8月、秋が近づくと秋サケの定置網漁の始まり。9～12月の間は、拾い昆布をしながら昆布の出荷に向けた作業。11月後半からハタハタが獲れ出す。ハタハタが終わると、また拾い昆布に戻り、冬が来て1年が終わるというサイクル。

## 4. 昆布漁のこと

### (1) 昆布の生活史

次にメインである昆布について説明。昆布の生活史はとてもユニーク。まず、昆布の葉の部分からたくさんの遊走子が海中に放出され、遊走子は泳いで岩などにくっついて配偶体になる。配偶体には雄と雌の区別があって、それぞれ精子と卵細胞となり、それらが受精し、昆布の赤ちゃん（芽胞体）になる。それが成長して、水昆布と呼ばれる1年目の昆布になる。水昆布は秋に根元の部分を残して一度枯れるが、そこからまた成長をはじめ、2年目の夏に1年目のものより大きく厚みのあるいわゆる成昆布になって、それを採取している。



### (2) 2種類の昆布漁

昆布漁には「拾い昆布」と「採り昆布」の2つの形態がある。時化や波で抜け、浜に寄りついた昆布を拾うのが文字通り拾い昆布で、周年実施されている。一方、採り昆布は磯船を使って海上に出て、生えている昆布を採るもので期間（7～10月まで）が定められている。漁期の始まりは3つの実行組合ごとに若干異なり、平宇が一番早く7月5日頃、冬島と旭は7月15日頃。



採り昆布漁

### (3) 昆布漁の解説と実演

まずは採り昆布。昆布採りは簡単に言うと、昆布を引っかけて採るだけ。しかし、その単純な中にそれぞれが経験と技術を駆使し、工夫を重ねている。漁期初期の漁場は主に海岸付近で船の上から「カギ」で昆布をひっかけ手で抜きとる。お盆を過ぎて9月頃になると陸に近い方には昆布が少なくなるので、漁場も徐々に水深のある沖へと変わる。そうなると道具もカギから「ねじり」に代わる。水深に合わせた長さのパイプの先に付けたS字型の器具で海中の昆布を絡め、回してねじり切って引き抜く。船の上からは昆布が見えないので、ねじりの感触で海底の様子を探る。船で使う漁具はこの2つしか認められていない。



青年部長 泉さん

次に拾い昆布。単に手で拾うほか、水中のものはカギで引き寄せても採る。このカギ竿では届かない場所にあるものは「マッケ」を使う場合もある。ロープを結んだマッケを海中に投げ、昆布をひっかけながらロープで回収する。岩場に引っかかっても強く引っ張ると曲がって外れるようにするため、マッケの先の部分は曲がるようにできている。18歳の若者から80歳の老人まで年代に関係なく自分の体力に合わせてやれるのが拾い昆布の良いところでもある。

### (4) 昆布の出荷まで

採った後の昆布は、陸回り（おかまわり：陸上作業のお手伝い）さんにも手伝ってもらって一本一本丁寧に専用の干し場で天日で干す。乾いたら、出荷基準である3尺5寸（105cm）の長さに切る。次に保管袋に入れて15日間くらい寝かせ、昆布本来の色を出す（養生）。養生の途中で湿気を帯びると色が悪くなったりするので、天気の良い日にはまた外に出して天日干しを行う（火入れ）。次に行うのが等級の選別作業（選葉：せんぱ）。昆布の等級はかなり複雑で、それに合わせた選別には熟練を要する。等級別に区分した後は、油圧を使った機械で圧縮し、20kgごとに束ねる。その後、適正な等級に選別されているかどうか検査を受け、ようやく出荷となる。



選葉の様子

採るだけでなく、昆布の付きを良くするため、重機を使って海岸を造成したり、海底の岩石を掘り起こしたり、雑海藻を除去したりといった昆布漁場の管理も漁の合間に実施している。

### (5) 昆布以外の海藻類

昆布以外の海藻漁について。フノリの漁期は2~6月で、月に2回、大潮回りの時に実施。磯場の岩に付いているのを、手でむしり取る。真水で洗ったのち、天日乾燥させ、ピンセットなどで丁寧に小さなゴミを取り除いて出荷される。フノリより一段階深い磯に生えるマツモの漁期は3月以降。採るときの道具は、ハサミや包丁など人それぞれで、伊藤さんは女性用カミソリを使用(右上写真)。水洗い、ゴミ除去のあと、300グラムずつすだれの上で海苔のように形を整え、乾いたら出荷。



## 5. 魚介類のこと

海藻以外の魚介類の漁について。3月にはエゾバフンウニやホッキ漁が始まる。ホッキ漁は、船の上からホースで水を噴射して海底を掘り起こし、同時に爪のついたマンガンという漁具(右中写真)を船で引っ張りながら海底のホッキをすくい取る方法で行う。白貝やエゾバカガイも同時に獲れる。6月の数日間にはナマコ漁も。ナマコは通称「八尺」というそり状の漁具を船で引いて獲る。ナマコが八尺の前部のチェーンにぶつくとナマコは驚いてキュッと丸まって転がり、後部の袋に入るといった仕組み。漁場の水深は20メートル以上。マガレイやマツカワなどのカレイ類が岸寄りする初夏から夏は刺し網漁。根魚のカジカ類も同時に獲れる。タコ漁は7月中旬から中休みをはさんで2月頃まで行われ、漁法はタコ箱が主。11月下旬から12月初旬はハタハタのシーズン。家族総出で網から外し、大きさ別に選別。小さいものは主に飯寿司用。時には25cmもある大きいものが揚がることも(右下写真)。冬島に3ヶ統ある定置網漁は春と秋の2回。春定置は4月20日頃に始まり、トキシラズやサクラマスが揚がる。秋サケを獲る秋定置は9月1日に始まり、11月下旬まで続く。



## 6. 最後に

様似の自然の中で生きる者として最近感じていること。十勝沖地震以来、地盤が沈下したのか水位が上がったのか、海岸線が陸側に徐々に近づいていて、それに伴い海藻類の付き場も変わってきているのを実感している。また、日本海側で起きているような海の砂漠化とも呼ばれる磯焼け現象がこの付近でも始まっているように見える。昆布が目に見えて減り、キタムラサキウニだけが目立つようになってきているからだ。その対策として、昨年からは昆布の遊走子の散布実験を始めているし、放出される遊走子の量を増やそうと、意図的に昆布を採り残すなどの試行錯誤を始めている。また、今後はキタムラサキウニの駆除なども検討していくつもりである。最後に、せっかくアポイの根っこで生活しているのだから、自然と会話しながら、ジオパーク運動にも参加しながら、この大地でこれからもずっと漁を続けていきたいと思う。



アポイ岳ジオパーク ふるさとジオ塾通信 Vol.17  
 発行：2012年4月  
 発行元：〒058-8501 様似郡様似町大通1丁目21  
 様似町アポイ岳ジオパーク推進協議会事務局  
 (様似町役場商工観光課)  
 電話：0146-36-2120 FAX：0146-36-2662  
 E-mail：apoi.geopark@festa.ocn.ne.jp  
 ホームページ：http://www.apoi-geopark.jp/